

丸吉(八戸)と市内就労支援施設タッグ

漁網のリサイクル実現

世界的に海洋ごみの削減が叫ばれる中、八戸市内の企業が連携し、漁網のリサイクル事業に取り組んでいる。漁業会社「丸吉」は、これまで焼却処分してきた使用済み漁網の分別回収に着手。作業の一部を就労継続支援A型事業所「ライブワークス」に委託し、リサイクルの工程を確立した。持続可能な開発目標（SDGs）の視点や海を守る意識が求められる中、関係者は「取り組みが広がってほしい」と期待を寄せる。

（金濱千優希）



親網ロープとナイロン網を切り放す作業。漁網リサイクルは海洋保全のみならず、事業所利用者の収益にもつながっている。2日、八戸市内

焼却処分やめ分別回収 海守り利用者収入に

水産物の漁獲に欠かせない漁網は、消耗品であるが故に海上で逸失、放棄されることがある。持ち主不明で海中を漂うことから「ゴーストギア」（漁具の幽霊）とも呼ばれ、海洋汚染の要因となっている。

丸吉の関川順悦常務取締役によると、リサイクルに取り組んだのは、ナイロンで作られた網を水産関係者から買い取り、再利用する青森県外の業者を紹介してもらったのがきっかけ。

ただ、廃網はナイロン網と親網のロープなどが複雑に絡んでおり、分別に膨大な手間と時間、人手がかかることがネックだった。

事業開始に当たってリサイクルに回したのは、丸吉所有の大型底刺し網船「第88正進丸」から出た廃網。6枚×30枚の大きさで、一度の長期航海で約700枚にも達する。遠洋漁業に従事する船員に分別作業まで強いるのは難しく、これまでは泣く泣く焼却処分してきた。

そこで、市内で自動車な

どのリサイクル事業を手がける「エコブリッジ」（中里明光社長）の子会社で、解体作業などに精通しているライブワークスに作業を委託。市内にある作業場では、10人ほどの利用者がはさみを片手に、親網と網を手際よく切り離していた。

分別した網は業者に買い取ってもらい新たなナイロン製品に再生し、親網などのロープ類は再び漁で使うリサイクルを描く。当面は年4回ほどある正進丸の水揚げに合わせて、廃網を処理。ナイロン素材であることなどの条件が合致すれば、他船の網の受け入れも視野に入れる。

漁網リサイクルの試みについて、ライブワークスの代表でもある中里社長は「これまで焼却するしかなかった網が仕事につながり、利用者の収入にもなった。利用者も一生懸命取り組んでおり、『三方よし』の事業だ」と絶賛する。

丸吉の関川常務も「海洋環境が守られ、焼却による排ガスや経費の削減にも効果がある。自分たちが良い例になり、活動が広がればうれしい」と強調。業界内で取り組みが加速することを期待した。